

一休かるたとは

一休禅師（一二三九四〜一四八二）は今を去る六百年前の一月一日に生まれ、波瀾万丈の生涯を貫き、八十八歳の長寿を、酬恩庵で全うされました。禅師は、止まる事なく近畿一円を巡錫し、各界の人々と交流を深め、今日いわれる、国際化・情報化・高齢化時代の先駆者的役割を果たされました。その一端を『一休かるた』に集約し、遺徳に学びたいと志向された特定非常利活動法人一休酬恩会により、平成三年に製作されました。

い



一休さん
ひとやす
一と休みせず
米寿まで

一休は、後小松天皇と南朝の日野中納言の娘照子姫との間に生まれた。帝の嫡子でありながら宮中を出て、波乱万丈の人生を送り、八十八歳の天寿を酬恩庵で全うした。

ろ



六歳で
はなはな
母と離れて
安国寺

応永六年（一三九九）一休六歳の頃、母の考えて安国寺の像外鑑公和尚の許に出家した。侍童名を周建と名づけられ十一年間にわたって禅の修行をした。

は



話さない
ひでん
秘伝を文字に
書き記し

のどの病を治す家伝の秘法を、誰にも話さないという約束で、一休は老人からその処方を教えられた。帰るとすぐに一休は、この秘法を立札に書き込んできた。

に



二十二で
かそうぜんじ
華叟禅師の
門たたく

虚堂和尚から六代目にあたる大徳寺派の高僧華叟禅師は権力に迎合する京の寺院を嫌い、大津堅田に禅瑞庵という庵を結んでいた。華叟の教育は厳しく、命がけて師事した。

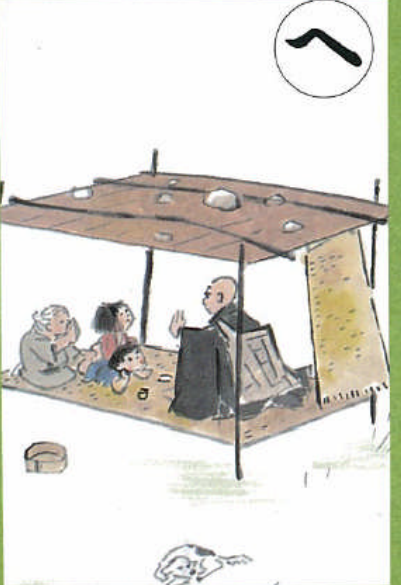
ほ



骨かくす
かわ
皮には誰も
迷いけん

美人というも皮のわざなりと続く。これは親当の歌で、一休は皮にこそ男女のへだてあれ、骨にはかはる人かたもなしと歌う。この道歌問答は前後にかなりの数がある。

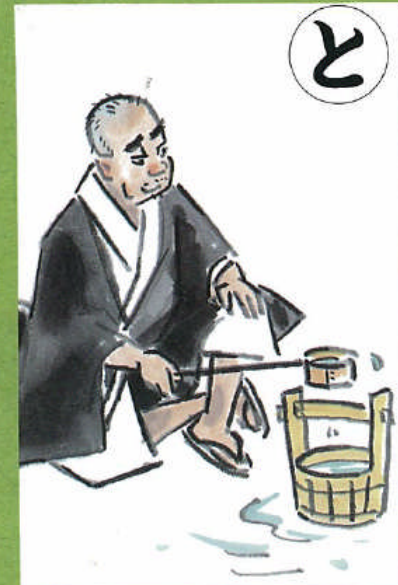
へ



へつらわず
おごることなく
庶民禅

帝の嫡子でありながら権威に対しては徹底して対峙したが弱い者には人の道を解りやすく説いた。居を定めることなく放浪の僧として庶民の中で禅を実践した人であった。

と



どろみず
泥水も

おどめて使え
人心

澄ませば清き 元の清
水と続く。
江戸時代につくられた
一休の『道歌』は歌
の中の一つである。
道歌は仏教の教えなど
を詠んだ歌で、中世よ
り盛んになった。

ち



ちかまさ
親当と

丁丁発止の
禅問答

雄川新右衛門、本名は
物部親当、武術・和歌
・書にすぐれ、将軍足
利義教に仕えて政所代
になる。夫婦共に一休
との親交が深く、多く
の禅問答があり、道歌
問答が残っている。

り



りんじゅう
臨終で

死にともない
だだをこね

『本阿弥行状記』に、
一休和尚臨終の時、死
にともないと弟子にの
たまひける事、甚だ珍
数事にて、一休ならで
はかやうの事は給う
まじ、此意味筆紙の及
ぶところにあらす。

ぬ



ぬ
抜いた太刀

さかい
堺の街の
質知識

一休四十二歳の時、堺
の街で太刀を持って歩
き、今の僧侶はこの刀
の様に、外から見れば
真剣に似ているが、内
は木製の様に切ること
が出来ない質物ばっか
りと批判をした。

る



るてん
流転の身

いっさ
一簣一笠
飯の宿

二十七歳で大悟の後、
一簣一笠の姿で法を説
き、近畿一円を巡錫し
た。銅駝坊・売扇庵・
暗馳庵など宿を定めず、
放浪の生活を送り、晩
年、薪村の酬恩庵に移
り生涯を全うした。

を



を
老いらくの
恋の連れ合い

しんにょ
森女どの

一休七十八歳の文明三
年(一四七二)仲冬十四
日、住吉の美師堂で盲
人森侍者の艶歌を聞く。
二人は恋しこがれて、
薪村酬恩庵に住んだ。
一休三十三回忌に森女
が参詣した。

わ



わた
渡されて

ひな
火に投げ入れた
印可状

禅宗では大悟の証明と
して師匠より弟子に筆
蹟を与える。これを印
可状という。印可状を
渡された一休は「印可
状より、行動が大事」
とこれを受けず、墮落
した僧侶を嘆いた。

か



かどまつ
門松は

めいど
冥途の旅の
一里塚

めでたくもありめで
たくも無しと続く。
親当との道歌問答で、
本歌は、馬笥籠も無く
泊り屋もなしらしい
一休は、正月に髑髏を
杖の先につけて、家々
を回ったと言う。

よ

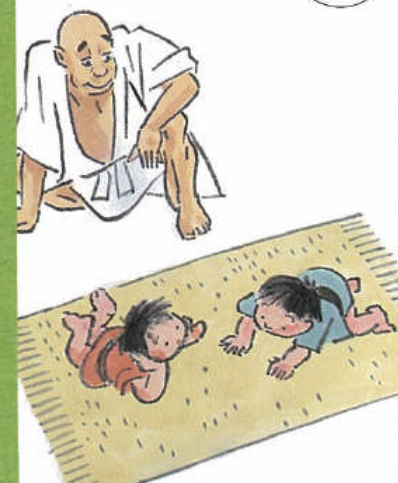


よ
世の中は

くね
食て寝て稼いで
死ぬばかり

世の中は 食って稼い
で寝て起きて 扱
の後は 死ぬるばかり
ぞ 一休と親当の道歌
問答である。
たかが人生、されど人
生、肩肘はらず、一休
の生きざまに学ぼう。

た



新村
今に伝える
延織り

縄を縦糸に、葉を横糸とした建は、敷物・包装・建物部材など多くの使い道がある。この延織りは貧しい薪村人の生活を支えるために教えたという。昭和の中頃まで生産された。

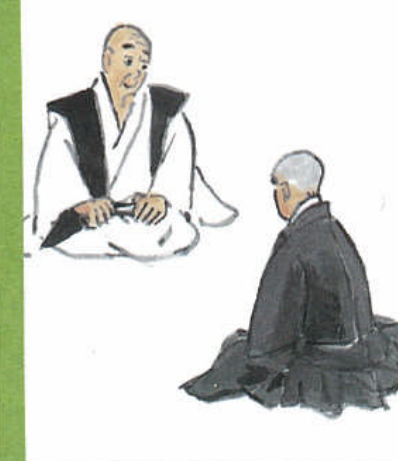
れ



蓮如との
出会いも一期
一会にて

寛正二年（一四六二）十一月、蓮如は宗祖親鸞の二百回忌の大法会を本願寺で執行了。この時一休は六十八歳、蓮如は四十七歳で、一休はこの法会に参詣した。

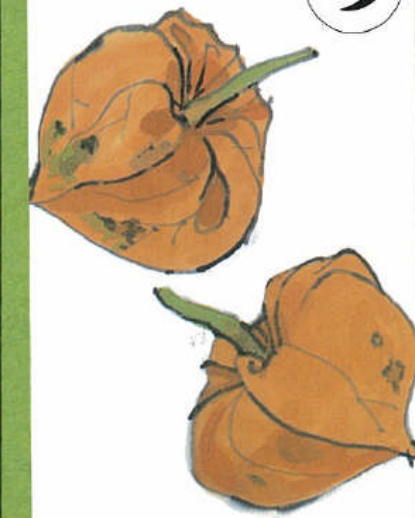
そ



宗純の
名を受け五年
謙翁と

禅の悟りに達した人に渡される左巻を謙翁として受けず謙翁と呼ばれた師の下で一休は五年間修行し「吾が蘊蓄は全部汝に授け、もう教えるものなし」といわれた。一休十七歳。

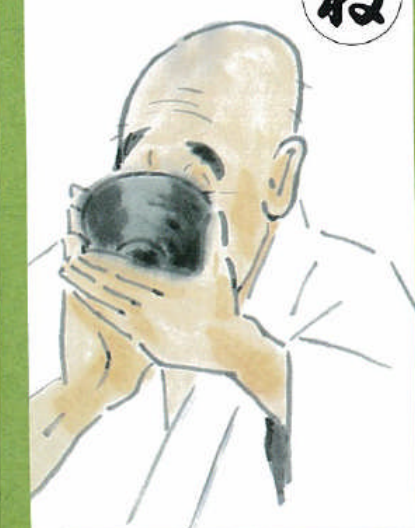
つ



追善に
おうた仏が
盆棚へ

年々くれば 浮かむせは無しと一休は歌う。追善とは、死者の冥福を祈るために、善事・仏事・興行などを行うこと。盆棚は、うら盆の時に、位牌を安置する、精霊棚のこと。

ね



眠気よけ
一休 珠光の
佗び茶かな

村田珠光は大和に生まれ寺僧になるが還俗して京都に行き、一休に師事し禅を学ぶ。坐禅の眠気よましに喫茶を教わった。茶の湯と禅寺の茶の作法を取り入れ、茶道の開祖となる。

な



何事も
みな偽りの
世なりけり

死ぬるといふも まこととならねばと続く。一生は、すべて仮の世であった。死ぬということも、実ではなかった、仮の姿が消えるだけのことだ。「一休偈骨」の中にある一首。

ら



洛西の
民家で生まれし
千菊丸

一休の幼名は千菊丸、応永元年（一三九四）正月元旦に、洛西の民家で生まれた。父は第百代後小松天皇、母は日野中納言の娘照子姫、母が南朝の出の為、皇居を離れて生まれた。

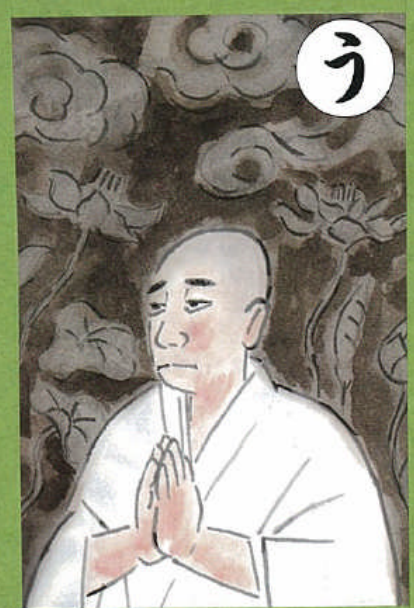
む



紫の
衣受けても
身につけず

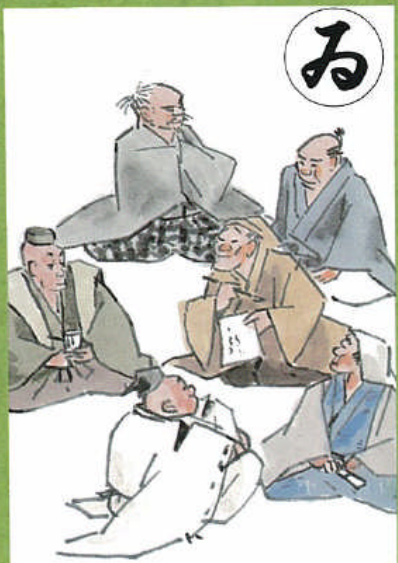
文明六年（一四七四）一休八十一歳の時、後土御門天皇から、大徳寺第四十七世の住持の勅命を受け、紫衣を賜わったがこの衣を身につけず、戦火で焼失した大徳寺を復興した。

う



有漏地より
無漏地へ帰る
一と休み

雨降らば降れ 風吹けば吹けと続く。有漏とは煩惱のこと、無漏は煩惱のない悟の世界。一休二十五歳の時、その師華嚴は一休と大書して、一休の道号を与えた。



る

居並ぶは
薪に集う
文化人

一休を慕って、鯛恩庵へ多くの文人雅客が訪れた。能の禪竹・茶の珠光・連歌の宗長・俳諧の宗鑑・西の蛇足と、枚挙にいとまがなく、薪村は、あたかも、芸術村の盛であった。



く

九年まで
坐禅するこそ
地獄なれ

虎空の土どなれるその身を、と続く。遠慮が壁に向かって九年間も坐禅をしたのは地獄で、虎空の腹にひどい自由の身を苦しめたど、『一休骸骨』の中に歌われている。



け

袈裟ころも
これも世人の
他力なり

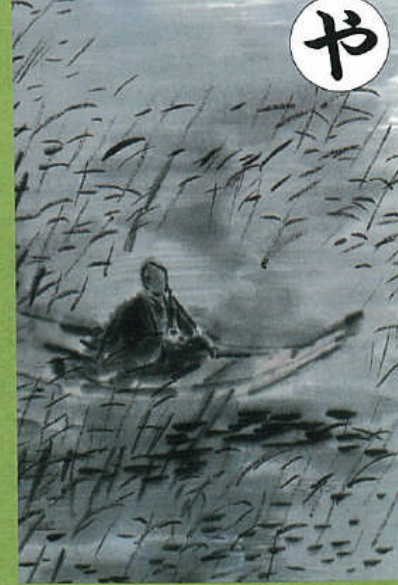
袈裟ころも、ありがたそうに見ゆれども、これも俗家の、他力本願。一休と親当の道歌問答。身につけている物で、人の判断は出来ない、との意。



の

乗った輿
八十一より
大徳寺

一休八十一歳の文明六年（一四七四）、勅命により大徳寺第四十七世の住持となり、薪村の鯛恩庵から京都紫野の大徳寺まで輿で通い、戦火等で焼亡した大徳寺を復興した。



や

闇の夜に
鳴かぬ鴉の
声をきき

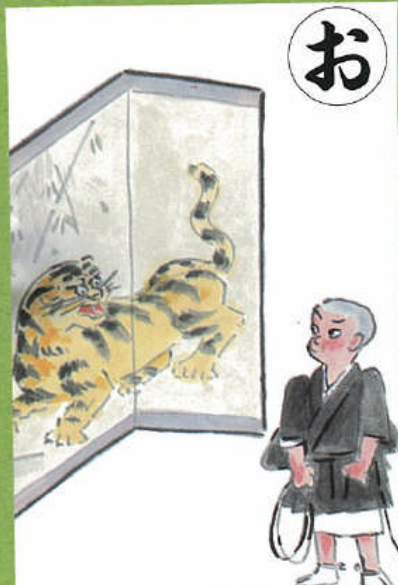
密雲低く垂れこめた真の闇夜、一休は例の如く琵琶湖畔の小舟の上で坐禅をしていた。この時、ただ一声「カアッ」と鴉が鳴き、一休は大悟した。二十七八歳の五月二十日のこと。



ふ

仏法は
鍋の月代
石の髯

絵にかく竹の、ともずれの音と続く。これは一休が姉川親当の妻辰女と交した道歌問答で、鍋の月代（剃毛）も、石の髯も、絵にかく竹のともずれの音の何れも無いものばかり。



お

追い出せぬ
びょうぶに描いた
虎退治

將軍義満が一休を試すため、びょうぶの虎を縛ってくれと頼む。一休は、縄を持って、將軍にこの虎を追い出してくれと切り返す。『一休咄』より。



ま

丸くとも
一角あれや
ひとごころ

あまりまるきは、ころびやすけれと続く。完全なものもよいが、少し欠点のあることが望ましい。好事魔多しと俗言にもある。『一休道歌』は歌の一首。



こ

金春に
酔うは一夜の
薪能

観阿弥・世阿弥父子の思想と芸風を伝承し、世阿弥の娘揚巻の智と、なった金春禪竹は、一休に師事した。一休寺の門前に金春の芝居や屋敷跡がある。人柄や芸風は超一流の能楽者。

え

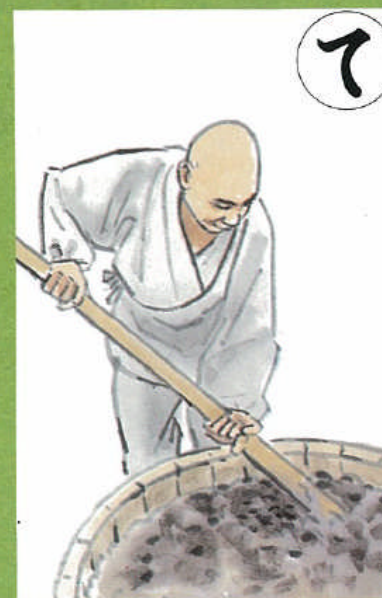


画師蛇足

ともに師弟の間柄

曾我蛇足は山水花鳥人物画の名手で、父は明の唐秀文という人である。禅においては一休が師、画においては蛇足が師であった。蛇足の画に一休が賛したものが残っている。

て

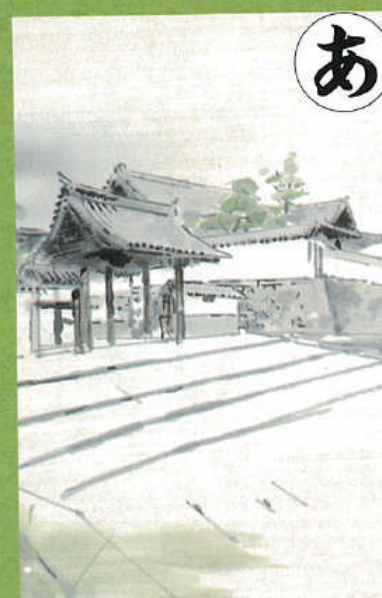


天日干し

納豆は和尚の伝授味

夏の土用の太陽が照りつけ、蟬時雨が一きわ激しくなる頃、納豆の仕込みが始まる。大豆・麴粉・麴・塩湯等を原料にし、半年以上天日干しにした、一休伝授の蛋白性保存食。

あ



荒れ果てし

寺を再興

一休が尊敬する大応国師が建てた妙勝寺が荒れているのを嘆き、一休六十三歳の時再興をし、塔頭を大応の恩に酬いる處として、酬恩庵と名づけ、晩年の居住地とした。

さ



挿した箸

芽が出て根がでて三本杉

一休と、浄土真宗本願寺第八代の建如と、室町幕府の政所代で武術や和歌に秀でた越前新右衛門こと親当の三人が食事をして、その箸を挿したのが三本杉になったと言われる。

き



君ゆえに

身をやつしけり我がいのち

一休二十二歳、堅田の禪興庵(祥瑞庵)で峻厳な華夷の禅を学ぶ。やせた一休に友人が問えば、我のみか 釈迦も達磨も 阿羅漢も この君ゆえに 身をやつしけれ と詠んだ。

中



遺偈には

虚堂来たるも半銭と

遺偈とは遺言のこと。一休は、遺偈に、尊敬する虚堂が仮に目の前にやって来ても、聞くべき説教も語るべき悟りも無い と記した。一休の虚堂に対する、最高の偈である。

め



名曲の

響きなつかし

一節切

一節切とは、一休が使用した尺八の事で、全体で竹の節が一つしかない事からこう呼ばれている。この尺八は今一休寺にある。一休は自ら『紫鈴法』という曲を作った。

み



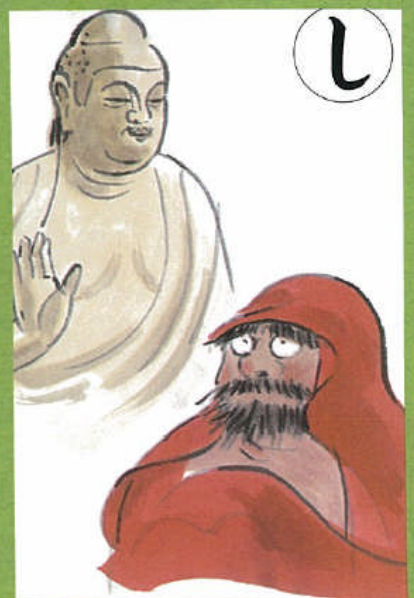
身を投ず

二十歳の春や

瀬田の川

「もう教える事が無い」と言われた一休の師謙翁が看護の甲斐もなく急逝した。師を埋葬し、清水寺に詣でた後、母の許に帰り、石山観音に七日間参籠して瀬田川に入水した。

し



釈迦達磨

奴にせよと

母は言い

一休の母が、一休に当てる達磨の一節で、仏門で修業するからには、仏教の開祖釈迦や、禅宗の始祖達磨を、弟子にするような人間になれと励ました言葉と伝えられる。



あ 笑み浮かべ
はし 端を渡らず
はし 橋渡る

一休といえは、頓智とくる。頓智とは、「ア」といへば「ウン」と返る智恵のことである。一休が来るので、「このはし渡るべからず」と書いた立札を立てたが真中を渡ってきた。



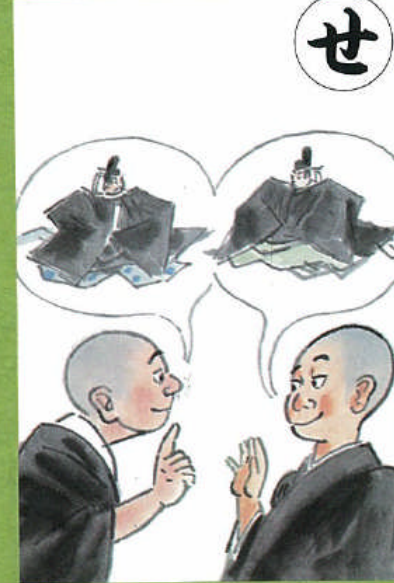
ひ 檜の笠で
あたま 頭が焼けたと
こら 子等は言い

薪村の甘南備山で薪を採る子供に、「葉の火で葉がこげて、毛が無い」と一休が言うと、子供は檜笠の一本に、「火の木で頭が焦げて禿頭になった」と言ったとやら。



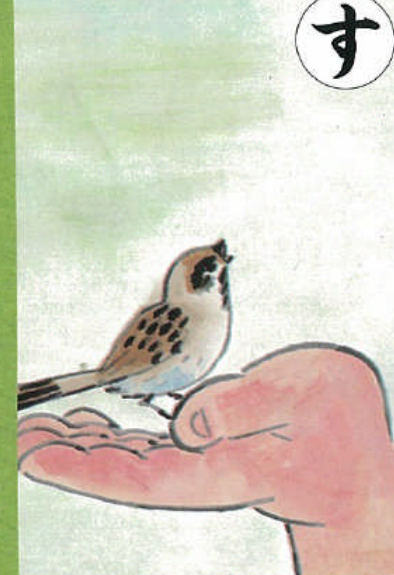
もくぞう 木像に
びんばつう 髻髪植える
でし 弟子墨済

一休は一番弟子である墨済に命じて木像を彫刻させ、自分の髻髪を抜いてその木像に植える。この木像は現在も御恩庵方丈に安置されている。



せ 説法に
うじ すじょうと
氏素姓説く
そう なげ
僧嘆き

仏法を説き禪を説く者が、やれ自分は源氏出だ、平氏出だ、藤原氏出身だなどと、つまらぬことをいうておるは。仏門に入ったものは誰もが釈迦の弟子でみな同じで一休は言った。



す 雀の子
そんりん 尊林と呼び
わが 家族

一休が家族のように非常に可愛がっていた雀が死んだので、これに尊林という号をつけ葬式までした。尊林は釈迦より一つたものである。



ん ながない
世を渡り行く
ふうきうし 風狂子

んは五十音図や、いろは歌の中にはない。んはうんに通じ感動詞。一休は人間でありながら、人間の枠を脱れて生き、いや、人間らしく生き、自らを狂雲と号した。